

アリゾナ大学医学部短期留学報告書

長崎大学医学部医学科 5年 牛場貴則

私は今夏、JECCSによるアリゾナ大学医学部短期留学の6期生として、Sarver Heart Centerにて4週間の医学実習をさせて頂きました。ご支援くださった皆様のおかげで、本当に充実した経験を得ることができました。内容は例年通りですので、その詳細な記述は省き、留学を通じて日々考察したことを中心にご報告させて頂きます。今後臨床留学を希望される医学生にとって参考になれば幸いです。

1. Medical School Education

アリゾナ大学医学部で感じたことは、教育的態度が浸透していたことである。まず、医師だけでなく、看護師やエコー技師が医学生に教える。フェローはレジデントを教え、フェローとレジデントは医学生を教える。また、指導教授と一緒に過ごす時間は、グラウンドラウンドの1時間、心電図判読の1時間、聴診レクチャーの1時間と、合計少なくとも毎日2時間以上はあった。以下に一週間のタイムスケジュールを記載する。文化や制度など差異はたくさん挙げられるが、米国の医学教育の生産性の高さを明白に実感した。

A Weekly Schedule

	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
7:00	Morning Conference				
8:00	Auscultation Lecture				
9:00	Floor	Floor	EKG Reading	Floor	EKG Reading
10:00	Floor	Floor	Floor	Floor	Catheter Lab
11:00	EKG Reading	EKG Reading	Floor	EKG Reading	Floor
12:00	Lunch		Ground Round	Lunch	
13:00	Floor	Floor	Outpatient	Round	Floor
14:00	Round	Floor	Outpatient	Round	Round
15:00	Round	Round	Outpatient	Floor	Round
16:00	Floor	Round	Outpatient	Floor	Floor
17:00	OFF				

実習では常に能動的な姿勢が求められた。ベッドサイドでの聴診の後には、フェローがWhat did you hear?と聞き、医学生は聴診内容をアウトプットする。鑑別疾患の列挙は、What is the most common disease?と発生頻度に沿って問われる。検査や治療のプランニングでは、What is the initial approach? What is the

next step?というように、優先順位や順序に沿った理解が求められる。また心電図や聴診のレクチャーでは、診断に至るまでの思考過程を、系統的にプレゼンテーションする方法論を学んだ。カルテ作成には、薬品の一般名と投薬量まで把握が必要となる。

評価制度も徹底していた。同じチームの学生がお互いを評価し、例えばプロフェッショナルリズムなども評価項目に入る。講義では、各講師が行うモジュール毎に学生評価が行われる。中間時点で一度評価とフィードバックを受け、最終時点で二度目のフィードバックを受ける。ケーススタディの教官には、MDを持たない基礎研究者も多数参加し、必要に応じて事前講習を受講する。Faculty Development、教育の改善システムが定着しているようであった。

2. Meanings of Becoming Doctors

米国ではご存知の通り、大学卒業後に医学部に進学するメディカルスクール制度が導入されている。Cardiology Consult Teamで共に学んだ医学生は、パイロット養成学校を卒業し、空軍に勤務した後にメディカルスクールに進学した。エンジニアや、会計士、新聞記者出身のレジデントもおり、バックグラウンドの多様性を実感した。またMD・JD(法学博士)の取得プログラムに在籍する医学生もいた。これはDual Degreeと呼ばれ、JDの他にMBAやMPHを取得できるプログラムも存在する。

医師になるという選択は、米国では日本と異なる意味合いをもつように思えた。苦学の末、立派な医師となられた方をたくさん拝見した。アリゾナ大学の指導教官の一人は、以前看護師として勤務され、40代後半でメディカルスクールに入学し、50代前半で医師となった。医師になった経緯を語った後、我々医学生にメッセージを贈ってくれた。その言葉はFollow your dreamsであり、その人の生き様により立証された重みが伝わってきた。

その他、難民としてアメリカに移住して思春期を過ごし、メディカルスクールに入学した医学生もいた。インドのメディカルスクールを卒業後、USMLE を高得点で合格し、医師としてアメリカに移住した者もいた。互換制度のあるカリブ海諸国のメディカルスクールを卒業後、米国でレジデントとなった者もいた。

彼らに接して感じたのは、日本に生まれたということは非常な恩恵であるということである。ハングリー精神という言葉が適切かわからないが、米国で生き残り家族を支える、あるいはキャリアを構築することへの強い意思を感じた。インド出身のドクターから、日本は第2次世界大戦後ほとんど何もない状態から経済大国に発展したという話を伺った。時間軸を巻き戻すと、普段意識することのなかった日本の底力を思い出した。

3. Knock The Door

ドアをノックするとチャンスへの扉が開かれる。米国実習を通じてそのような事柄を次々と経験した。私はアリゾナ大学短期実習開始よりも早期に渡米し、Mayo Clinic, Phoenix にて一週間病院見学を行った。アリゾナ大学のあるTucson から車で2時間程の距離にある。

Hospital Internal Medicine に所属して、レジデントを shadowing した。米国の研修は7月から開始され、私が見学したのは8月初旬であった。インターンと呼ばれる1年目の研修医は、メディカルスクール卒業後数ヶ月であったが、病棟管理や救急外来を落ち着いてマネジメントしていた。

レジデントや医学生の教育担当は Attending Physician と呼ばれる。その多くは、病棟で入院患者のケアを担当する Hospitalist と呼ばれる医師である。勤務シフトは、病棟での診療、研究プロジェクト、休暇などがそれぞれ1週間ずつで組まれる。患者の立場からは一週間毎に医師が交代することになるが、レジデントが主治医として一定期間継続して患者を受け持つ。

見学の準備と実施期間の中で、様々なドクターとの出会いに恵まれた。この機会は長崎大学と広島大学の先生方のご協力を得て実現した。Mayo Clinic で出会った先生方から、様々なアドバイスをや Oral Presentation の機会を頂いた。お世話になった全ての方々に心より感謝する。

4. 総括

最後に個々のお名前を挙げることは控えますが、JECSS の方々、事務局の方々には本当にお世話になりました。先生方の著作を留学の前後で読み、自分自身の歩みの参考にするとともに、叱咤激励して下さったことに感謝します。また、実習を終え帰宅するといつも温かい手料理を振舞ってくれたホストマザーの Ms. Gerry にも感謝します。偉大な先生方と友人との出会い、渡米のチャンスをくださったことに心より感謝しつつ、筆を置きます。ありがとうございました。